

平成27年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT27127 病気別の食事を考えた自分カルテ作り'15:人形のおなかを見てさわってきいてみよう



開催日: 平成27年7月25日

実施機関: 関東学院大学

(実施場所) (六浦キャンパス)

実施代表者: 永田 真弓

(所属・職名) (看護学部・教授)

受講生: 小学校5・6年生 19人

関連URL:

【実施内容】

1 プログラムの目的

本プログラムは、科研費による研究を通じて作成した小児がん治療中の子ども(小学生)の食生活を支援するプログラムをアレンジし、受講者が食事と栄養、健康な子どもでも風邪を引いた時に生じる発熱や吐き気などの症状出現時の食事、消化管に関する基本的な知識を学び、生じやすい症状について自分の体の状態に合った食事対策について考えることを目的とした。

受講者である小学生には難しいと思われるような、体のことや食事のことで、楽しみながら知ること、子どもでも「セルフケア/セルフマネジメント:自分の体や生活を、いい状態にしようとする」ことができることを体験してもらおう機会とした。

2 受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために留意した点

- ・科研費により作成した小児がん治療中の食生活支援プログラムの電子版リーフレットは、小学生を対象としていたため、講義「食事と栄養、食事と症状について」は、その電子版リーフレットを可能な限り活用した。昨年度、受講者が分かりにくかった栄養バランスの内容については補足スライドを挿入し、講義内容が分かりやすくなるように一部加筆した。
- ・受講者が小学生であることを念頭において、集中できる時間や講義と実習の組み合わせを考慮し、1つの講義時間や体験・実習の時間は30分以内とし、講義した内容をすぐに体験・実習できる構成にした。
- ・体験・実習にシミュレーター人形を用い、テーマにあるように「触って、見て、聴いてみよう」の感覚を通した人体の解剖や機能に関する学習機会を多くした。
- ・受講生は4～5名のグループ編成とし、各グループに1名の教員を配置することで、疑問や質問等にすぐに対応できる体制を整えた。
- ・基本的な学習を終えたあとの復習には、○と×のコーナーを移動して身体を動かしながら答える○×クイズを使用し、学習方法にメリハリをつけた。

3 受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを工夫した点

- ・夏休み期間中の活動や宿題等に活用できるように配慮し、開催時期を7月末としたところ、自由研究に活かしたいという受講者の声が聞かれた。

・少人数によるグループでの体験・実習を行うために、実習室内でシミュレーター人形と座席との移動を繰り返す形式となったが、キャラクターによるグループ分けをしたことで、スムーズに移動が行われ、1グループ毎のシミュレーター人形を用いた体験・実習の時間が、十分に確保できた。

・腸音を聴診する体験・実習では、シミュレーター人形を使用し教員とダブルステートにより腸音を確認した後、一人用のステートを渡して、自分の腸音を確認するよう促したところ、受講生は自らの腹部を聴診して、腸音を確認することができていた。また、シミュレーター人形の他の身体部分やコンピューターの作動に関する興味・関心を持つ姿もみられた。

・シミュレーター人形を使用しない時には、1人に1冊の人体図鑑仕掛け絵本を配布し見てもらうことで、これまでの学習内容の復習のみならず、本プログラムで学習した消化管以外の人体に関する興味・関心をもつことに繋がっていた。

・自分カルテの作成では、受講生に起こりやすい症状を連想してもらうことや学習してきた資料を活用することにより、症状出現時の食事対策が具体的に考えられていた。

・昼食時やクッキータイムでは、飲食が済んだ時点で、緊張を緩和するとともに、グループ活動がスムーズに行われるようにアイスブレイクを実施したところ、プログラムに参加することで友達ができたといい意見が聞かれるように、グループ内での受講者同士の交流が活発となった。

・自分カルテの発表は、各グループ1名をランダムに指名して行った。4名全員が講義内容を踏まえ自分の症状に合わせた食事について堂々と発表をし、それぞれの学びが共有できた。

4 当日のスケジュール

10:00～10:30 受付(金沢八景キャンパス E6号館4階(第4実習室)集合)

10:30～11:00 開講式(あいさつ、オリエンテーション、科研費の説明)

11:00～11:30 講義「食事と栄養、食事と症状について(講師:永田真弓)」

11:30～12:00 体験・実習「しかけ絵本とモデル人形を使って、消化管を観察してみよう」

12:00～13:00 昼食・休憩

13:00～13:30 講義「腸音とそのきき方について(講師:飯尾美沙)」

13:30～14:00 体験・実習「聴診器を使って、シミュレーション人形のおなかの音をきいてみよう」

14:00～14:20 体験・実習「おなかのいたいときはどんなものを食べたらいいかな? ～症状別食事対策クイズ～」

14:20～14:50 クッキータイム&質疑応答

14:50～15:10 体験・実習「症状別食事対策:自分カルテを作ろう」

15:10～15:40 修了式(アンケート記入、未来博士号授与)

15:40 終了・解散

5 実施の様子(図、写真等を用いてわかりやすく記入してください)



人体解剖仕掛け絵本で消化管の観察



解剖モデル人形の「腸」の長さを測定



聴診器で自分の腸音を聴取

6 事務局との協力体制

・総合研究推進機構運営課が委託費の管理、または日本学術振興会への連絡調整や提出書類の確認・修正

等を行った。

・総合研究推進機構と学部庶務課、広報室が連携しながら実施に伴う手続を行った。

7 広報活動

・神奈川県が主催するかながわサイエンスサマープログラムに登録し、県内の小学校に広報誌が配布され広報が広くいきわたるようにした。

・キャンパス近隣の駅に募集案内ポスターを掲載した。

・付属小学校にポスターおよびチラシを配布した。

・6月に開催された大学イベントの際にチラシを配布し、近隣に広報した。

8 安全配慮

・受講者については短期のレクリエーション保険に加入した。(実施者及び実施協力者、実施担当事務職員については加入している労災保険が適用される。)

・聴診器の使用時は、消毒した清潔な状態で使用できるようにアルコール綿を準備し、使用ごとに消毒した。

・当プログラムには、危険を伴う実習等は含まれていないが、プログラム中は受講者5名当たり1名の実施者を配置し、受講生の様子を充分目を配れる体制を整えた。

・受講者の体調不良に備え、大学の医務室との協力体制を整えた。

・室内のプログラムだが、熱中症予防のため、飲料水を準備した。

・食物アレルギーの受講者には、昼食やクッキータイムの際には、各自でお弁当を準備してもらい、また、可能なおやつを出す等により対応するとともに、食品を提供する際には本人確認を確実にを行った。

・集合・解散の時刻を早めたことで、バスの乗車が可能な時間帯に終了することができたため、乗車による熱中症予防や帰宅時の安全面に対する配慮に繋がった。

9 今後の発展性、課題

・受講者が分かりにくかった栄養バランスの内容については補足スライドを挿入し一部加筆したこと、また、2年目となり実施者の役割分担がスムーズであったことから、プログラム全体の時間短縮につながったことから、復習のための〇×クイズの難易度を上げて考える時間に充てる等、のさらなる工夫が必要と考える。

・本学部は、開設3年目であり、小児看護学実習において基本的な知識・技術を修得した学年の学生がいないことから、学生の協力は得なかった。今後は、学生にも協力を得ることで受講定員数が増加可能となり、その受講者増分に対応していくことができると考える。また、学生が実施協力者になることによって、看護の基本的知識・技術の獲得にも繋がると考える。

・受付から開会式までの時間は、隣の在宅・老年・精神実習室を開放し、展示・掲示物やモデル人形等の見学を実施した。受講者・保護者ともに、関心を示し、興味深く見学をしていたことから、看護学への興味・関心をさらに深めることができるよう、展示物や掲示物の充実についても検討することが必要と思われた。

【実施分担者】

看護学部 助教 飯尾 美沙

看護学部 助手 清水 裕子

【実施協力者】 1 名

【事務担当者】

総合研究推進機構運営課 係長 森 賢司